二週間前。
地底――魔界の中心地、デスキャッスル・玉座の間。

「お暇‥‥なようですな、ピサロ様」
「デスピサロと呼べ、と言ったはずだ」
玉座に座った銀髪の男は、不機嫌そうに答えた。
「で、暇そうに見えるか」
「戦いたくてうずうずしている‥‥そのようにお見受け致しますれば」
「ふん」
手に持った銀の杯の中の赤い液体を、ぐいと飲み干す。

玉座の前で、直立のまま、頭を下げ、年老いた僧服の男が言う。
「‥‥面白い『暇潰し』を見つけました」
「暇潰し？」
「エンドールで武術大会が開かれます。それに参加なされては」

銀髪の若者‥‥デスピサロの眉が吊り上がる。
「エビル‥‥私に、人間共の腕比べに出よと言うのか」
杯を、床に投げ捨てる！
わずかに残った酒が、床に赤い溜りを作る。

声の調子は変わらないが、デスピサロは怒っている。
そのように、エビル、と呼ばれた僧服の老人は見て取った。
だが、彼も驚かず、そのままの調子で言う。

「エンドール武術大会は、人間共の『最強』を決める、最高峰の大会とか‥‥それに出場するような人間とならば、少しは戦いを楽しめましょう」

僧服の老人の目が、ぎらりと光る。

少し、間があった。

「人間は憎い。奴ら相手に、歯止めは効かぬぞ」
表情を変えず、デスピサロは訊く。
「ルール上は、相手を殺すことに問題はございませぬ。その意味でも、デスピサロ様の御意にかないましょう」

「御意にかなう‥‥か」
　デスピサロは、口元に軽く笑みを浮かべた。
「確かに、貴様の言う通り、暇潰しにはなりそうだ。腹の中で何を企んでいるかは知らぬが、乗ってやる」
　それを聞いた老人が、慌てて言う。
「な、何も企んでなど‥‥全てはデスピサロ様のため、やがて来るその御世のため‥‥」
「まあ良い。面倒なことは任せた‥‥休む」
　言うと、立ち上がり、玉座の奥に消えて行った。

　頭を下げたまま、それを見送ると、老人は呟いた。
「大魔道（ハイウィザード）」

　音も立てず、老人の後ろに、もうひとり、僧服の男が現われる。
「お呼びでございましょうか。エビルプリースト様」
「デスピサロ様がエンドール武術大会に出場なさる。準備を」
「御意」
　答えると、出現した時と同じく、音も立てず、すうっと掻き消えるように、姿を消す。

（これで良い‥‥）
　誰もいない玉座の間で、ひとりエビルプリーストは思考に耽る。
（ピサロ様は強い‥‥今のピサロ様にかなう人間などおらぬ。
　人間界の最強を決めるこの大会、これに集う精鋭を一網打尽にするためにも、ピサロ様ご自身の愉楽のためにも‥‥
　こたびの企て、これ良策なり‥‥ククク‥‥）

　そして、先ほどの大魔道（ハイウィザード）同様、音もなく、その場から消える。

　残された玉座は、何も語らず、ただ鈍く紅く光る。

＊

　この物語は、後に「不屈の王女殿下（ハイネス）」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

熱血格闘系・ドラクエ４二次創作小説

「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト４・導かれし者たち」第２章より～

第 11 話　「黒衣の虐殺者（ジェノサイダー）（後編）」

あさづけ兄貴

明らかに。
明らかにそれは、かつて一度も起こった事がない、そして、起こること自体想定されていなかった事態であった。

戦闘台（リング）に、一六人もの選手が、一度に上っていた。
うち一五人が、戦闘台（リング）の半分に押し込めれるように立ち‥‥もう半分の、その真ん中ほどに立つ、ひとりの若者と対峙しているのだ。

剣も抜かず、構えもとらず。
仁王立ちの銀髪の若者。

それは憎しみか、怒りか。
激しい感情を込めた視線を、その銀髪の若者は、眼前の十五人に投げ続けている。

その若者の圧倒的な闘気の前に、様々な武器を手にした一五人もの猛者が、間合いを詰める事ができずにいる。
それほどの闘気。

両者、動かぬまま。

魔法で増幅された声が、場内に告げた。
「ただ今より、第３５回エンドール国王杯争奪武術大会、Ａブロック第一試合、時間無制限一本勝負を行います」

本来ならば、対戦相手の名を告げるべきアナウンスが、その名を告げない。
そのことが、この事態の異常さを、如実に物語っていた。

そして、次のアナウンスの一声とともに――

「**試合開始**（ファイト）！」

――惨劇は、そう、惨劇は始まったのだ。

＊

「どうした」
若者が言う。
「楽しませてくれるのだろう？　人間の精鋭よ」
挑発的な口調。

「な‥‥」
輪金鎧（リングメイル）を着込んだ選手のひとりが、鞘から長剣を抜いた！
「なめるなあああっ！」
叫ぶと、デスピサロに向け、走った！
わずかな距離で体をスピードに乗せ、剣を両手で上段に振りかぶる！
そのままデスピサロの正面でジャンプ！
その頭に向け、渾身の空中兜割り！
「食らええっ！」

刹那。
赤い瞳が光った！
その右手が、電光の速さで鞘から剣を引き抜く！
そのまま剣を振り抜き、頭上に迫りくる剣を払う！

ガキィン！
金属のぶつかる、激しい音。
そして、それと共に、何かが、くるくると回って落ち‥‥
ざくっ、と、戦闘台（リングダ）の砂の床に刺さった。

折れた剣の刃だった。

デスピサロのではない。切りかかった剣士のものだ。
デスピサロの一撃は、遅い来る剣撃を弾き払うのみならず、その剣を折っていたのである！
そう、たった一撃で。

そして、それだけではなかった。

空中の剣士の体が、一瞬脱力し、そのまま真下に崩れるように落ちる。
直後、その頭の上半分に、一本の線が横に走るように浮き出たと同時に、そこから赤い透き通る液体がほとばしり出た。
そして‥‥
剣士の体が倒れると同時に、彼の頭の、その線から上の部分が、ずるっ、とずれた。

ずれた部分は、ひっくり返って、地面へ。
からーん、と、硬質な音。
その部分が外れた頭には、当然、ぽっかりと穴が開いている。

穴から流れ出る脳、脳漿、そして血液。
それを、先ほどの外れた部分が‥‥まるで皿のように、髪と頭皮と頭蓋骨より成る皿のように、受け止めていた。

デスピサロの剣は、ひと薙ぎで、剣士の必殺の兜割りを払い、剣を折り、そしてなお勢い衰えず、剣士の頭を頭蓋骨ごと横に斬ったのである。

拳を右へ薙いだポーズから、デスピサロは、剣を収めず、そのまま右手を下ろした。
そして言う。

「愚かな」

人をひとり殺したというのに、表情はまるで変わらない。
暗い紅の瞳。憎悪の色。

「死ん‥‥だ？」
「こ‥‥殺しやがった！」

　口々に叫ぶ選手たち。

　この世界の人々にも、死は平等にやってくる。
　そして、そこから助かる術はない。

　どんな深い傷でも、生きてさえいれば、傷は治る。
　生命、その本質である代謝を加速し、組織・器官の構築と修復を高速で行う。これが回復魔法の本質である。
　しかし、それは、基本的に「生命活動を営んでいる」、つまり「生きている」者にのみ効果があるものであり、既に生命活動が停止しているものには効果がない。

　そして。
　重要なことに、この世界には、死者を蘇生させる呪文が事実上存在しないのだ。

　確かに、教会に伝えられる死者蘇生呪文‥‥「ザオラル」「ザオリク」といった呪文は存在する。
　だが、世界の教会には、この世界で、これらによって死者を蘇生させることに成功した、という記録はひとつも存在しないのである。

　人間が使いこなすには必要な魔力が多過ぎる、とも、そもそも呪文として作用しないものである、とも言われている、これらの「蘇生呪文」。
　しかし、そうであっても、それは代々、各地の教会に伝えられてきた。
　そのことには、恐らく、意味はあるのだろうと思われるのだが‥‥

　それはともかく。
「人は死ぬ。そして蘇らない」。
　我々が住むこの世界となにひとつ変わらない、それが、この世界での同意事項（コンセンサス）であった。

　そして、その事実が、試合開始早々、選手のひとりを襲ったのである。

（なんと‥‥！）

ブライの目が、くわっ！ と見開かれた。

「モニカ、見てはならん！」
王が席を立つと、モニカの前に立ちはだかり、その視界を隠すように、華奢な体ごと、自らの胸に抱き留める！
「お父様‥‥」
父親の胸に顔を隠しながら、愛しい娘は、しかし、力なく言った。
「もう遅いですわ‥‥私、見てしまいました」
顔を上げる。
「お父様‥‥私、怖いのです。怖くてしかたがないのです」

人が無残に死ぬ瞬間。
今、モニカ・ド・エンドールが目の当たりにした光景は、これから長い間、心理的外傷（トラウマ）として、彼女を苦しめることになる。
彼女がそれを振り払うには、今からやや時を経た後、彼女自身が、再び「死」と向き合うまで、待たねばならない。
だが、いずれにせよ、それはまだ語られるべき時ではない‥‥。

蒼白な顔で、モニカは言う。
「また人が死ぬのでしょうか？ お父様、また人が死ぬのでしょうか」
「モニカ‥‥」
父王は、何も言えない。

彼は予想していた。確信していた、と言ってもいい。
あの様子では、犠牲はあのひとりでは済まない。もう数人‥‥下手をすれば、皆殺しだ。

しかし、それはルール違反ではない。
大会中に相手を負傷、あるいは死亡させることがあっても、それは罪に問われない。
そして、デスピサロの戦い方にも、今のところ、反則を取れる行為はないのだ。
つまり、大会委員長でもある王オーギュストは、目の前で起こった、そしてこれから起ころうとしている殺人行為に対し、何ら無力であることになる。

それを、オーギュストは、娘に言う事ができなかったのだ。
何という屈辱！　何という無力感！

一方。

　その時、ブライは、ひとり、また別のことを考えていた。
（あやつ‥‥）

　彼は、見たのだ。
　デスピサロが、剣を抜き、向かってくる剣士の頭蓋骨を、兜割りの剣ごと薙ぎ切った時、彼の長い髪に隠れていた耳を。

　上に長く、先が尖っていた。

（人間では‥‥ないのか）

　そして、もうひとつ。
　彼の剣だ。

　やや黒ずんだ色調、そしてその鈍い光沢は、今まで彼が見た、銅、鉄、鋼、銀、金‥‥いずれの金属とも、異なっていた。
　そして、人間の頭蓋骨を、剣ごと両断した、その切れ味。

（あれもまた、人間の作り出せるものではあるまい）

　ブライの思考は、袋小路をさまよっていた。
（一体何者なのじゃ‥‥あやつは）

＊

「次は楽しませてくれるのだろうな‥‥それとも、また無駄に人数を減らすか」
　剣を再び鞘に収めながら、デスピサロが言う。
「どっちだ‥‥人間」

「くっ‥‥」
　最前列に立っていた大柄な戦士が、歯ぎしりした。
　周囲に、きょろきょろっ、と目配せすると、背中に背負った鞘から、彼の身長よりも長そうな、巨大な両手剣（ツヴァイハンダー）を引っ張り出す。
　無論、そのようなものを、普通の剣のように、上方向に引っ張り出せるわけがない。
　柄を握り、横にずらす。上でなく横に、この剣は引っ張るようになっていた。
「ほう」

その剣の巨大さに、思わずデスピサロも声を上げる。

戦士は、両手剣（ツヴァイハンダー）を、文字通り両手で正眼に構え、すうっ、と剣先を下げると‥‥

走り出した！
デスピサロの懐、その右側めがけ！
重い両手剣（ツヴァイハンダー）を持っているとは思えない、そのスピード！

そして、それと同時に、もうひとり、走り出した選手がいた！

黒い拳法着に身を包んだ、髪をそり落とした小柄な男。
間違いなく、武術家である。

彼が、先ほどの戦士とは逆‥‥つまり、デスピサロの左側をめがけ、凄まじいスピードで、駆け寄ったのだ！

デスピサロは、黙して動かず！

「キエエーッ！」
気合い一閃、武術家がジャンプ！
デスピサロの頭部めがけ、必殺の飛び蹴りを繰り出した！

「ぬおおおっ！」
同時に、逆側の戦士が、渾身の力を込めた両手剣（ツヴァイハンダー）で、デスピサロの胴を横薙ぎに狙う！

右と左、上と下。
全く別の場所を、全く同時に狙う、武術家の蹴りと戦士の両手剣（ツヴァイハンダー）！

デスピサロは‥‥
右手をゆっくり上げると‥‥
自分の顔を捉える寸前の、武術家の蹴り脚をつかんだ！
それだけで、武術家の体が、宙に浮いたまま、止まる！
まるで、軽く放られたボールを受け取るように、片手で、全力の蹴りを止めたのだ！

そして、それと同時に、左逆手で鞘の剣の柄をつかみ、引き出す！

ギィン！
鋭い音と共に、引き出された剣が、両手剣（ツヴァイハンダー）を受け止めた！

驚愕する、武術家と戦士！
完璧に見えたコンビネーションが、いとも簡単に防がれた‥‥

しかし。
この状態、つまりデスピサロの両手が塞がった状態を作り出すこそが、実は彼らの真の目的であったのだ！

「メラミッ！」

叫びと共に、選手たちの列の間から、西瓜（すいか）ほどの大きさの、赤い火球が飛び出した！

他の選手たちに隠れ、息を殺してじっと様子を窺っていた、茶色い長衣（ローブ）の太った男。
一見して魔道士と分かる出で立ちのその男は、デスピサロの両手が塞がるこの一瞬を、ただひたすらに待っていたのだ！

火球を飛ばす「メラ」系の上級呪文。
最上級呪文「メラゾーマ」には及ばないものの、当たり所によっては、鍛錬を積んだ人間をも、一撃で倒せる威力を持った呪文だ。

その魔道士の手から放たれたそれが、デスピサロの顔面へと、一直線に飛ぶ！

武術家も、戦士も、魔道士も。
完全な勝利を確信していた。
完璧な作戦だと、信じていた。

――デスピサロが次の行動を取るまでは。

彼は、右手を‥‥武術家の足を持ったまま、左下に振り下ろしたのだ！
「うわっ！？」
‥‥そう、彼の頭を、迫り来る火球にぶつけるように。

ヴァオオッ！
「ぐあああああっ！」
灼熱の火球が、武術家の顔面を焦がす！

顔面を押さえる両手の、指の間から洩れる黒煙！
肉の焦げる異臭！

デスピサロは、武術家の体を、まるで子供が木の枝でも振り回すかのように、軽々ともう一度持ち上げると、そのまま勢いを付け、自分の左に立つ戦士へと投げつけた！

「なにっ！？」
驚愕に、戦士の対応が一瞬遅れた！
顔面黒焦げの武術家の体が、戦士に思い切りぶつかる！
「ぐおっ！」
衝撃で後ろによろける戦士！

そして、その次の瞬間だった。

ブシュオッ！

デスピサロが、逆手のまま、左手で鞘から剣を引き抜くと‥‥
武術家と戦士、二人を串刺しにしたのだ！

正確に、二つの心臓を刺し貫く刃。
「ぐぼっ！」
「ぐふっ！？」
二人の口から、泡となった血が噴き出す！

そして、二人は、動かなくなった。

＊

デスピサロは、次の瞬間には既に、ただの屍に成り果てた二人には、興味を失っていた。

彼は、あの紅く暗く燃える瞳で、睨んでいた。
まだ生きている、戦闘台（リングス）の向こう端の選手たちを。

　そして、彼らの中に隠れる、メラミを撃った魔道士を‥‥

「ひ、ひっ‥‥」
彼と目が合ってしまい、思わず息を飲む魔道士！

　デスピサロは、何も言わず、二つの屍から剣を引き抜くと、右手に持ち替え、そのまま上段に構え‥‥
　一気に打ち下ろした！
「ぬんっ！」

　ビュアアッ！
　風が起きた！

　風は、戦闘台（リング）を駆け、選手たちの隙間を縫い、通り過ぎた！
　その勢いと砂ぼこりに、思わず選手たちが目を閉じる！

　風がやんだ後。
　再び目を開いた選手たちは、それを見て、愕然とした。

　茶色い長衣（ローブ）の魔道士が、ひらきになっていた。

　冗談ではない。
　魔道士の体は、その真ん中で両断され、その左側と右側に分かれ、左右に倒れていたのだ。

　デスピサロの放った風の中に潜んでいた、真空の刃。
　それこそが、魔道士を一刀両断にした者の正体である。

　上級の戦士の使う技のひとつに、真空の刃を飛ばす「真空波（エアーエッジ）」というものがあるが、デスピサロの放った風は、それと酷似したものであった。

「少しは、知恵を使ったということか」
　デスピサロが、口を開く。
「もっとも、その程度の物が『知恵』と呼べるならばの話だがな」

淡々と、表情を変えず。
「どうした。もう四人も死んでしまったぞ」

ここに至って、選手たちはようやく悟った。

目前の相手は、今まで自分たちが戦ってきた相手とは、「根本的に」違う。
何もかもが、根本的に。

人間の頭蓋骨を相手の剣ごと叩き斬り、全力の飛び蹴りを片手で止める、その力。
「左右両側同時の攻撃を囮としたメラミ」という多段のフェイントコンビネーションを、最小の労力でかわし切る、その判断力。
そして、それらの能力もさることながら、もっとも、選手たちを震撼させたもの。

それは、「冷酷さ」であった。
人を殺して、かつ、眉ひとつ動かさぬ、その冷酷さ。

明らかに、人を殺すことに慣れている。
と言うよりも、人を殺すことを何とも思っていない。
まるで、雑草をむしるように、人の命を刈り取ってゆく。

それが、あまりにも異質であったのだ。
死神か、天使か――何か、この世ならざるもののように思われたのだ。
もちろんそれは、「魔族」であるデスピサロの評価としては、当たっているのであったが。

（やべえ‥‥こいつは、本当にやべえ‥‥）
選手たちは、思った。
（殺される‥‥こいつを倒さなければ‥‥次は俺たちが‥‥）

目前に立ちはだかる、次元の違う強敵。
既に四人の選手を屠った彼に勝ちうるとすれば、その方法は、ただひとつ‥‥

（全員による、同時攻撃！）

「う‥‥」
　選手のひとりが、半狂乱になりながら、叫ぶ！
「うわあああああああああああっ！！」
　そして、両手に持った戦槌（ウォーハンマー）を振り回しながら、デスピサロめがけ、やみくもに走り出した！

　それを合図に、残りの選手たち十人が、武器を手に、一斉にデスピサロに襲いかかる！

　攻撃したのは、十人。
　全十六人中、死者は四人。
　デスピサロを除き、残りは十一人のはずだが‥‥？

　実は。
　この時、この攻撃に参加していなかった選手が、ひとりだけいたのだ。

　白いシャツとズボンに包まれた、筋肉質の大きな体。
　左胸の胸鎧（チェストガード）が、呼吸と共に、大きく前後する。
　両手の手甲（ガントレット）がかすかに震え、両手に持った鋼の棍（ロッド）の先端を小刻みに揺らす。

　髭面の、歯の根ががちがちと打ち合わされる。

　そう。
〈破砕棍（マッシュロッド）〉マクダニエル。
　彼は、この攻撃に、参加する事ができなかったのだ。

（くそったれぇ‥‥体が動きやがらねえ‥‥）

　決して小心者ではなく。
　決して臆病者ではなく。
　かつては、兵士として戦場に立ったこともあるこの男が、この時だけは、デスピサロに立ち向かう、その一団に加わることができなかったのである。

（無意識のうちに、あいつにビビってるってのか‥‥この俺が‥‥）

思わず、そんな思考が頭に浮かぶ。
が、それは、半分だけ正しく、半分は正しくなかった。

彼を戦闘に加わらせなかったもの。
それは、彼の五感、勘、経験、その他全て。
言い換えれば、彼の「生存本能」とも言うべきものであった。
それらが、彼を生かそうと、生き長らえさせようと‥‥
彼の肉体に対して、いわば最大音量の「警告信号（アラートシグナル）」を送ったのだ。

彼は、生きる必要があったのである。

だが、彼自身はそうは思わない。
（俺は‥‥こんなに腰抜けだったか‥‥？）
恐怖に震え、動かぬ身体（からだ）を呪いながら、歯噛みしながら――
彼はただ、眼前で繰り広げられた、その光景を見ていることしか出来なかったのである。

「それでいい‥‥。いや、なぜ最初からそれを選択せぬのだ」

無表情で言い放つと、剣を抜き放つデスピサロ！
そこに襲いかかる選手たち！

一閃！　二閃！　三閃！

デスピサロの剣が閃き‥‥
止まる。

次の瞬間だった。

剣を振り切った姿勢のまま、彫像のように動かないデスピサロの周りに‥‥
血の柱が林立した。

選手たちの手にしていた、剣が、短刀（ダガー）が割れ、槍が、鉾槍（ハルバート）が、戦鶴嘴（ウォーピック）が、大鎌（デスサイス）が折れ、鞭が、連鎖棍（フレイル）が千切れ‥‥
そして、彼らの身体もまた‥‥
ある者はその身に深く刃を差し込まれ、ある者は胴をまっぷたつに斬られ‥‥

血の柱を上げながら、次々と、次々と‥‥

見開かれる、マクダニエルの瞳！

いや！
それでもなお、最後の抵抗を試みる者たちがいた！

ジャラッ！
デスピサロの背後から、鎖が伸び、その首に巻き付く！
「ぬっ!?」
その鎖をたぐり寄せるように、一人の男が、デスピサロの背中に組み付く！
鎖でデスピサロの首を締めつつ、両肘を後ろ手に抱え込む！

蟷螂（マンティス）のグライア！
片目を潰され、身体に何ヶ所か深手を負いながらも、彼は最後の最後、デスピサロの背後を取ることに成功したのである！

ザスッ！
デスピサロの手から剣がこぼれ落ち、戦闘台（リング）に突き刺さった！

「今だ！潰せえっ！」
しわがれた声で叫ぶグライア！

「うおおおおおっ！」
その声に呼応し、前方から走り寄る男。

十人の総攻撃の際、一番最初にデスピサロに向けて突撃した、戦槌（ウォーハンマー）使いであった！
やはり、身体中から血を流しながら、戦槌（ウォーハンマー）を振り上げ、デスピサロに向け、突進する！

もはや、残された手段はこれひとつ。
失敗すれば、命はない。
死という断崖に立った二人の、文字通り、命を賭けた最終攻撃（ファイナルアタック）！

首を絞められ、両腕を固定されたデスピサロ。
万事休すかに見えたが‥‥

「むっ!?」
　そう叫んだのは、貴賓席（ロイヤルボックス）のブライであった。
「ど、どうされた？」
　衝撃に次ぐ衝撃の連続で、もはやエンドール王オーギュストの声にも力がない。

　愛娘モニカは、いまだ父王の胸に顔を埋め、戦闘台（リング）を見ようとしない。
　恐らく、その方がいいのだろうが。

「『炎の精』が‥‥集まっておる？」

「炎の精」とは、本来は炎の魔法を操る炎術士（ファイア・ソーサラー）の使う言葉である。
　その本態は「大気中の『燃える力を持つもの』」――錬金術師が「燃素（フロギストン）」と呼んでいるものと、同一のものである。
　それを自由自在にコントロールすることで、炎術士（ファイア・ソーサラー）は「魔法」を行う。そして彼らは、それを、親しみと畏怖をこめて「炎の精」と呼んでいたのだ。

　炎の魔法が使えぬ凍術士（フリーザー）のブライであったが、長年の魔道士としての経験故、「炎の精」の動きは、ある程度知ることが出来たのである。

　「炎の精」は、一点に集中するように、集まりつつあった。
　しかも、その一点とは‥‥

　‥‥後ろ手に固定されたデスピサロの、その左掌！

　それが何を意味するか、ブライは瞬時に悟った！
「いかんっ！」

　デスピサロの背後に立ったグライア。
　彼がその事を察知したのは、それから数瞬の後――
　彼の胸の前にあるデスピサロの掌が、淡い橙色（オレンジ）に輝き出した時であった。
　そして、その時には、既に手遅れであった。

　デスピサロが、低く小さく、しかしはっきりと‥‥その言葉を口にした。
「‥‥イオラ」

‥‥キィィィィィィン‥‥キュァッ！
突如、デスピサロの掌が輝きを増し、炎が爆(は)ぜた！
ドゴァアアアアアアアン！

グライアの胸部に、ぽっかりと穴が空いていた。
心臓と、片肺とを一度に抉られ、悲鳴すら上げる暇もなく‥‥
グライアは斃(たお)れた。

ガタッ！
蒼白な顔で、ブライが立ち上がった！

その直後‥‥いや、それとほぼ同時だった。

ジャオッ！
鎖を振りほどいたデスピサロの、その右足が跳ね上がった！

その足は、振り下ろされる戦槌(ウォーハンマー)に直撃した‥‥いや！？

ガシィッ！
「なっ!?」

蹴り飛ばしていた！
渾身の力で振り下ろされた戦槌(ウォーハンマー)を、何とデスピサロは、片足の前蹴りで受け止め、跳ね飛ばしたのだ！

何が起こったか分からず、一瞬判断の止まった戦槌(ウォーハンマー)使いの背後に瞬時に回り込むと、デスピサロは、右腕でその首を抱え込んだ！
左肘を右腕の下から回して曲げ、右手を相手の後頭部の後ろに差し入れる！
いわゆる「裸締め(スリーパーホールド)」の体勢！

そのまま締め続ければ、脳の血液が遮断され、気絶する。
ほぼ完全に、デスピサロの勝利が確定した‥‥

にもかかわらず。
彼は、そのまま腕を一気に、左側に捻り上げた！

ゴキァッ！

首の骨が折れる鈍い音とともに、“戦槌(ウォーハンマー)”使いの身体が、大きく、びくんっ！ と痙攣した。

腕を放す。
“戦槌(ウォーハンマー)”使いの身体は、顔を左後ろに向けたまま、地面に倒れ込んだ。
もはや、息をしていない。

「十四人‥‥」

屍を見下ろしていた紅い瞳を、前に向ける。
残るは、一人。

しかし、その時、その「残り一人」――〈破砕棍(マッシュロッド)〉マクダニエルは、もはやデスピサロを見ていなかった。
彼に背中を見せ、おぼつかない足取りで、場外へ向け、必死に逃げていたのである。

（だめだっ‥‥殺される！ 殺される！）

「場外に出てしまうと負けとなる」、これがこの大会のルールであった。
しかし。
もはや、大会がどうとか、勝利がどうとか、そのようなものは、彼には関係なかった。
死にたくなかった。
ただひたすらに、ただひたすらに。
死を回避するために。生きるために、彼は逃げていたのだ。

それを見たデスピサロは、一瞬目を細めると、落ちた剣を右手で拾い、そのまま片手上段に構える。

「あ、あの体勢は‥‥先ほどの！」
王が叫ぶ！

距離の離れたマクダニエルに向かい、デスピサロは剣を振り下ろした！
神速の剣が、風を、真空を巻き起こす！
ビュオオオオッ！

ブシャアッ！
「ぐあああっ！！」
真空の刃が、マクダニエルの右腕を捉えた！
肘の上で切断され、宙を舞う右腕！
吹き出す鮮血！
悲鳴を上げ、もんどり打つマクダニエル！

ザッ‥‥ザッ‥‥
ゆっくりと、デスピサロは、マクダニエルに向け、歩を進める。

それでも、マクダニエルは、残る左腕と両足の三本で、這いずるように、場外を目指す！
急速に失われてゆく、血液と体力！

もはや物音ひとつない。
静まりかえった闘技場（コロシアム）に、デスピサロの声が響く。

「他のものは私に刃向かった。だから殺した」

聞こえているのか、いないのか。
何かに取り憑かれたかのように、マクダニエルはただ、場外を目指す。

「貴様は、私に刃向かう事すら出来なかった」
軽蔑の紅い視線を、マクダニエルに向ける。
「私が貴様を殺さぬのではない。貴様に、私に殺される資格がないのだ」

蒼白な顔で、それでもマクダニエルは、戦闘台（リングダイ）を這う。
惨めな姿を、晒す。

「いずれ貴様のような者も殺す日が来る。その日まで‥‥這いつくばっていろ」

怒りと軽蔑に満ちた口調で、デスピサロが言った、その言葉は聞こえていたのか。
マクダニエルは、最後の力で、自分の身体を、目前の場外ラインに向け、押し出した。
そのまま、戦闘台（リングダイ）の縁を、ごろごろと、転がり落ちる。

その瞬間。

この戦い――十五対一の変則試合の勝者が、確定した。

『た、只今の勝負‥‥勝者、デスピサロ選手‥‥』

アナウンスが、場内に響く。

熱狂は、そこにはない。
静まりかえった観客席。

観客にとってもまた、デスピサロの勝利など、どうでもよいことであった。
むしろ、彼らの心に刻みつけられ、離れないもの――

血の海と、幾体もの骸(むくろ)の、そのただ中に立つ、銀髪の若者。
そのコントラスト。

この若者の手により、彼らの眼前で、十四もの命が、一瞬にして奪われたのだ。

「勝者‥‥か」
若者が、一瞬、苦笑を浮かべたように見えた。
「人間にただ勝って、何の意味があるというのだ」
ようやく、剣を鞘に静かに収めると、人差し指を頭上に掲げる。
「ルーラ」
その呪文に呼応し、上空に、彼がここに現れた時と同じ、スパークと空間の「穴」が出現した。
次の瞬間、若者が浮く‥‥いや、跳ぶ！

またたく間に、若者の身体は、「穴」に吸い込まれ‥‥消えた。

＊

残ったのは。

血の海。
そして骸の山。

「モニカ‥‥先に休んでおれ」

エンドール王オーギュストが、己の胸に顔を埋めた愛娘に呼びかける。
「お父様‥‥」
「余には、やらねばならぬ事がある」
モニカは、無言でうなずいた。

「誰ぞある」
王の呼びかけに、近衛兵のひとりが答えた。王のそばに近づき、直立する。
「はっ」
「モニカを王家控え室へ連れて行って欲しい。決して今のこの状態を見せぬように」
「御意に」
近衛兵は、己のマントを外し、モニカの頭の上から、それをふわっと掛けた。
ちょうどフードをかぶったように、モニカの横と後ろの視界が遮られた。
「それがしが手をお引きいたします。足下にお気をつけあそばされますように」

差し出されたモニカの手を、近衛兵が引き‥‥歩き出す。
その惨状をほぼ何も見ることなく、モニカは退場した。

父オーギュストは、一人目の剣士が命を落としてから、試合が終わるまで、決して娘に戦闘台(リング)を見せる事はなかった。
今のモニカの精神力では、その光景に耐える事が出来ない、と思ったからである。

確かに、その判断は正しかった。
だが、モニカが、自分の意思で、戦闘台(リング)上の悪夢のような光景を見据えねばならぬその時は、もうすぐやってくる。

モニカが去った後。
オーギュスト・ド・エンドールは、戦闘台(リング)上の光景を見て、一言言った。
「戦場(いくさば)だな‥‥まるで」

過去、自ら兵を率い、戦場に赴いたことのあるオーギュストの脳裏に浮かんだのは、敵味方双方の兵の骸が、入り乱れ、折り重なった‥‥その光景だった。

担架を持った兵士たちが、選手の亡骸(なきがら)を運び出してゆく。

「まさか、これほどの死者が出ようとはな」
　オーギュスト王の表情にも、声にも、彼の受けたショックが滲み出ている。

　無理もない。
　確かに、過去、この大会において、死者が出た事がないわけではない。
　しかし、今回の事態は、文字通り、桁が違う。

　一試合で十四人の死者。

　そして。
　場外に転がっている、腕を切り落とされた選手――もちろんそれは、〈破砕棍（マッシュロッド）〉マクダニエルであった――も、あの出血量では、そう長くは保（も）つまい。

　場内で呪文が封じられている以上、あれだけの、薬草などでは到底治せない深傷を治療するには、エンドール教会に運び、回復呪文をかける以外に方法はない。
　だが、教会に着くまで、彼の生命が保つとは、とても思えなかった。

「十四人‥‥いや、十五人か。あの選手も、教会に運ぶまで保たぬであろう」

　オーギュスト王の視線の先を追うブライ。
　担架に乗せられつつあるマクダニエル。
　斬られた右腕の、その切断面からは、変わらず鮮血が吹き出している。

　視線を、左に移す。
　マクダニエルが転げ落ちた場所の近くには、戦闘台（リングダ）への出入り口がある。
　この出入り口の向こうは、確か‥‥

（選手控え室‥‥あそこには‥‥！　もしや！）

　ブライの脳裏に、アリーナの言葉が蘇る！

『クリフトも‥‥私と一緒に、ここにいて』
『クリフトも一緒にいなきゃダメだって‥‥いや、むしろ私よりもクリフトの方が、ここにいなきゃダメだって‥‥』

（なるほど‥‥そういう事であったのか）
　ブライの脳裏には、先ほどのアリーナの勘が告げたものが何であったのか、そして、これから何が起ころうとしているのか、それが鮮明に思い浮かべられていた。

「陛下」
　真剣な目で、ブライが言った。
「ん？」
「うまくすれば‥‥」

　確信に満ちた、ブライの言葉だった。

「あの者、助ける事が出来るやも知れませぬぞ」

（つづく）

＜次回予告＞

死者、実に十四名。
そして今、その十五人目に名を連ねようとしていた、〈破砕棍（マッシュロッド）〉マクダニエル。

いや、そうはさせない！
呪文が封じられた闘技場（コロシアム）で、サントハイム聖教会・百年に一度の逸材と謳われた若者は、果たして彼の命を救う事が出来るのか！

「不屈の主女殿下（ハイネス）」第 12 話　「神の御旨（みむね）、人の業（わざ）」

教会の叡智とクリフトの勇気が――今まさに、奇蹟を起こす！